Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2024」
入　賞 作 品

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目　次

★優秀賞

滋賀大学大学院　データサイエンス研究科　井下　敬翔..... 2

立命館宇治高校　ＩＧコース２年　堂島　世梨..... 3

作新学院高等学校　トップ英進部１年　蒲原　詩織..... 4

法政大学　人間環境学部人間環境学科１年　伊藤　優希..... 5

東京学芸大学　教育学部　西　梨花..... 6

埼玉県立和光国際高等学校　外国語学科２年　増田　有真..... 7

兵庫県立国際高等学校　２年　神谷　あかり..... 8

福岡女学院大学　人間関係学部心理学科１年　下川　眞希..... 9

ニューヨーク大学アブダビ校　公共政策学部４年　山野井　咲耶..... 10

東京学芸大学　教育学部初等理科教育専攻１年　鈴木　大..... 11

★入賞

トヨタ自動車株式会社　電池製造技術部　丸山　大貴..... 13

灘高等学校　１年　小森　龍太郎..... 14

東京学芸大学　教育学部中等教育専攻書道コース１年　廣澤　愛佳..... 15

明治大学付属明治高等学校　３年　田中　優香..... 16

静岡文化芸術大学　文化政策学部国際文化学科２年　青山　萌..... 17

慶應義塾高等学校　２年　本間　丈太郎..... 18

慶應義塾大学大学院

システムデザイン・マネジメント研究科修士１年　水口　綾人..... 19

会社員　阿部　千穂子..... 20

佐賀県立佐賀北高等学校　普通科３年　久保　百花..... 21

亜細亜大学　経営学部経営学科１年　齋藤　優人..... 22

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2024」

★優秀賞

視点の改革：中国に対するバイアスを越えて

滋賀大学大学院
データサイエンス研究科
井下　敬翔

私は、自然言語処理モデルである LLM（大規模言語モデル）の出力に注目し、各国に対するバイアスを研究しています。特に、対立構造を仮定したテキストにおける分析では、中国に対して不利な判断が下される傾向が強いことが明らかになりました。このような傾向は、私たちが持つべき公正な視点を歪める要因となっています。

LLMのようなAI技術は、多くのデータを学習して人間に近い言語理解を実現していますが、そのデータ自体が既存のバイアスを含んでいる場合、モデルの出力にもそのバイアスが反映されてしまうことが問題です。例えば、GPT のようなモデルは、西洋に関連するデータが豊富であり、その結果、西洋の文化や価値観に対して肯定的なバイアスが形成される可能性が高いのです。このバイアスが影響する範囲は広く、特に中国のような国々に対する評価が不公平になるリスクを孕んでいます。

この問題は単なる技術的な課題にとどまらず、社会的にも重大な影響を及ぼします。AI は、ニュース、教育、ビジネスなど、さまざまな分野で利用され始めており、その出力が偏ったものであれば、それがそのまま人々の認識や判断に影響を与える可能性があります。たとえば、中国に関する情報が一貫してネガティブに描かれる場合、それを利用する人々は無意識のうちに中国に対する否定的なイメージを抱くようになるでしょう。

私は、技術が平等であるべきだと強く感じています。LLM のような高度な技術は、すべての国を公平に扱い、いかなる国や文化も差別されることのないよう設計されるべきです。これは、単に技術的な改善を求めるだけでなく、データの収集や利用においても多様性と公平性を確保することを意味します。AI が提供する情報が偏らず、公正なものであることが、国際的な協力や理解を深める基盤となるのです。

さらに、このような技術の公平性が確保されることは、平和な社会の実現に不可欠だと考えています。私たちが他国に対する偏見や誤解を持つことで、国家間の緊張や対立が生まれることがあります。しかし、技術を通じて公正な視点が広まり、各国の文化や価値観が対等に評価されるようになれば、国際社会において相互理解が深まり、平和への道が開かれるでしょう。

また、この問題を解決するためには、AI 研究者や開発者だけでなく、データ提供者や政策立案者も協力して取り組む必要があります。バイアスのないデータを提供し、AI の学習プロセスにおいて透明性を確保することが求められます。さらに、利用者自身も AI の出力を鵜呑みにせず、批判的な視点を持って情報を受け取る姿勢が重要です。

私自身の研究を通じて、データと技術を駆使してこの問題に取り組み、公正な視点を追求することで、偏見を超えた理解と相互尊重を促進していきたいと考えています。具体的には、対立構造を仮定したテキストを分析する際に、AI が出力する評価のバイアスを可視化し、その影響を最小限に抑える手法を開発しています。この手法を通じて、AI が国際関係において公正な判断を下せるようにすることを目指しています。

私が目指すのは、技術の力を通じて平和な社会を実現することです。技術が持つ力を最大限に活用し、すべての国が平等に尊重される未来を築くための一助となることを目指しています。そして、そのためには、私たち一人一人が AI の出力を批判的に受け止め、偏見

に基づかない情報を選び取る力を養うことが不可欠です。こうした努力が、やがてはグローバルな社会の中で、国際的な理解と協力を深める礎となり、平和で豊かな未来を築く一歩となるでしょう。

「中国を知るということは世界を知ること」

立命館宇治高校
ＩＧコース２年
堂島　世梨

現代のグローバル社会において、私たち高校生が果たすべき役割はますます重要になっていると考えます。特に、日本と中国という隣国同士の関係を良好に保つためには、若い世代が積極的に行動することが求められています。中国は、世界でも急速に成長している国の一つであり、その影響力は経済、政治、文化の各分野において強まっています。中国との関係を深く理解し、改善することは、アジア地域のみならず、世界全体の安定にも寄与すると考えています。私たち高校生が日中関係の改善や深化に向けて果たすべき役割には、いくつかの具体的な行動が挙げられます。

まず、言語学習が日中関係改善の第一歩として極めて重要です。私は中国語の学習を通じて、言語の壁を乗り越え、中国の文化や価値観を深く理解したいと考えています。言語は、異なる文化背景を持つ人々との意思疎通の基盤であり、正確なコミュニケーションが可能になることで、誤解や摩擦を防ぎ、相互の信頼を築くことができます。次に、中国のニュースや社会情勢を積極的に調べることも非常に重要です。中国の時事問題を理解することは、世界の動向を広い視野で捉えることにも繋がります。例えば、中国での経済発展、さらには国際関係における立場を学ぶことで、私たちは世界の動向をより深く理解し、日中関係の改善に向けたアイデアや解決の糸口を見出すことができるでしょう。現代の情報社会では、インターネットや SNS が情報収集の大きなツールとなっています。TikTok や Weibo といった中国発のプラットフォームを利用することで、中国の若者がどのような考えを持ち、どのような日常を過ごしているのかを知ることができます。これにより、私たちはリアルな中国を理解し、日中関係の改善に向けた具体的なアプローチを考えることが可能となるでしょう。また、SNS を通じて日常生活や文化についての情報を発信し、中国の高校生と共有することも効果的な手段です。日本の若者が普段どのようなことに興味を持ち、どのような生活を送っているのかを中国の同年代と共有することで、相手国に対する理解と親近感が生まれます。SNS は国境を超えて簡単に繋がることができるため、このような小さな一歩が国際交流の促進に寄与することが期待されます。それに加えて、日中の高校生が自分たちでアクションを起こすことが大切です。中国の高校生と協力して社会問題に取り組むことで、共通の目標に向かって連帯感を深めることができます。私自身、この夏休みに歴史問題に関するキャンプに参加し、中国の高校生と交流する機会がありました。そこでの意見交換は非常に貴重であり、両国の若い世代がそれぞれの国の問題について話し合うことで、国際問題の平和的解決に向けた新たな視点を得ることができました。このような直接的な交流は、教室での学びを超えて、現実の国際関係を理解するための重要な経験となります。

最後に、正確な情報に基づいて行動することが極めて重要です。現代の情報社会では、多くの情報が瞬時に伝わり、時にはフェイクニュースや偏見に基づく情報が拡散されることもあります。私たち高校生は、メディアリテラシーを向上させ、日中関係に関する情報を正確に理解することで、誤った情報に惑わされずに行動することが求められます。正確な情報を基にした行動は、周囲の人々にも良い影響を与え、社会全体の理解を深めることにつながります。このように、私たち高校生には、未来の友好関係を築くための多くの可能性が広がっています。一人ひとりの小さな行動が、日中関係をより良いものにするため

の大きな変化をもたらす可能性があります。これらの行動を通じて、私たちは日中関係をより良いものにするための一歩を踏み出し、世界の平和と繁栄に貢献したいと強く思います。

手紙に紡ぐ歴史の橋

作新学院高等学校
トップ英進部　１年
蒲原　詩織

日中戦争という過去の悲劇が、今を生きる私たちに問いかけています。「未来に向けた架け橋をどう築くのか」と。 この問いに向き合うべく、中国の友人・李君との文通を続けてきました。文通を通じて、私たちは互いの文化や生活習慣を理解し合い、友情を深めることができましたが、過去の傷跡が、私たちの友情を阻むように感じることもありました。

日中関係は歴史・領土問題、経済競争などの影響で、現在、緊張状態にあります。特に歴史問題では、戦争の記憶が両国間の感情に影響を及ぼし、対話の障壁となっています。こうした状況において、私たちの文通が果たす役割は、小さな光となりうるのではないかと考えています。

李君が語った祖父の話は、私に深い衝撃を与えました。彼の祖父は日中戦争を生き延び、家族を守るために戦いました。「戦争はすべてを奪ってしまう」という言葉には、戦争がもたらす変化と深い悲しみが込められていることが伝わってきました。特に印象的だったのは、李君が聞いた祖父のエピソードです。彼の祖父は、「銃弾が飛び交う戦場で、仲間を失う悲しみを味わいながら、家族を守るために戦った」と語ったそうです。その話を聞くと、彼の心の中に深く刻まれた恐怖と悲しみが、私の心にまで届くようでした。戦場で仲間を失った彼の祖父の体験を知ったとき、私の心は打ちひしがれ、想像を絶する生々しい苦しみが、私の中に深く刻まれました。

また、南京大虐殺に関する生存者の証言も聞く機会がありました。ある女性生存者は、「家族と共に隠れていた部屋で、銃声が響き、父親や兄の絶叫が聞こえた。その瞬間、私の心は打ち砕かれました」と、当時の恐怖と悲しみを語りました。そして彼女は日本軍に発見され、家族を目の前で失った経験を深く語り、「母と妹が泣き叫ぶ声が今でも耳に焼き付いています」と述べました。この証言を通じて、戦争の悲劇がどれほど個々の人生に深い影響を与えるのかを痛感しました。教科書では決して伝えられない、恐怖と悲しみがそこにありました。

このような証言を通じて、歴史の悲劇を理解することがどれほど重要かを実感しました。私たちは李君との文通を通じて、お互いの意見に耳を傾け、質問を繰り返しながら理解を深めていきました。最初は異なる意見に戸惑うこともありましたが、相手の立場に立って考えることで、少しずつ共通点を見つけることができました。特に、日本の歴史教育における南京大虐殺の扱いについて、李君と率直に話し合いました。日本ではこの事件に関する教育が不十分で、多くの日本人がその悲惨さを正確に理解していない現状があります。私たちは、対話を通じて歴史的な認識の違いを深く掘り下げ、お互いの意見を尊重し合いました。この対話を通じて、歴史的な対立がいかに根深いものであるか、そして広い視野を持つことの重要性を学びました。

歴史的な確執を乗り越えた後、私たちはお互いの違いを受け入れ、信頼関係を築くこと

ができました。例えば、中国の歴史ドラマを参考に家族観や社会構造について意見交換を行いました。李君は、中国の伝統的な祭事が家族の絆を深める重要な役割を果たしていると話し、日本の祭事との違いについて私に教えてくれました。このような交流を通じて、私も自国の文化に対する理解を深め、相手の文化に対する敬意を深めることができました。

私たちの文通は、単なる言葉のやり取りを超えて、歴史の深い傷を癒し、文化の違いを尊重し合う新たな理解を生み出しました。手紙が交わされるたびに、遠く離れた私たちの心が近づき、過去の痛みが少しずつ解消されるのを感じました。互いの体験や思いを手紙の中に綴ることで、私たちは過去の影を越え、新しい未来の扉を開くための一歩を踏み出しています。文通は、ただの言葉のやり取りに留まらず、未来への希望と変革をもたらす架け橋となるとを信じています。

イメージと現実

法政大学
人間環境学部人間環境学科１年
伊藤　優希

私は父の仕事の都合で、生まれて半年で中国へ渡った。それから幼稚園に上がるまで中国の大連に住んでいたらしいが、その頃の記憶は全く無く、特に自分から中国に関心を持つこともなかった。だから中国人に対しても、なんとなく声が大きくて早口で、少し怖そうという曖昧なイメージしか持っていなかった。

しかし、なんとなくのイメージや思い込みというのはときに大きな影響力を持つ。初めてそう感じたのは小学校高学年の頃だ。授業か雑談かはよく覚えていないが、話の流れで中国の話題になったとき、クラスの一部の人が中国人の悪口を言い始めた。それは、領土問題のことだったり、彼らがたまたま接した中国人の態度が悪かったことだったりしたが、それを総じて中国人全員を恨んだり嫌ったりするのはおかしいと思った。私はそれを聞いているうちに、なんとなくのイメージが共有されて事実のように扱われ、いつのまにか彼らの中に歪んだ中国人像を創り上げているように思えて、怖くなった。そして、このような思い込みやわかったふりは誰にでもあることであり、自分にも少なからずあてはまることだと思った。

私はその日、学校から帰ると、両親に中国での当時の生活について尋ねてみた。それまでは自分たちが中国に住んでいたことは聞かされていたが、詳しく話は聞いたことが無かった。まだ小さい兄と双子の私たちを外国で育てるのはさぞかし大変だったと思う。しかし、両親の答えは意外なものだった。確かに大変なこともたくさんあったが、中国人のベビーシッターが子供たちの面倒をよく見ていてくれたし、何より父の会社で働く中国人社員たちにかなり助けられたと言っていた。当時のアルバムを見せてもらったのだが、そこにはまだ幼い私たちと若い両親とともに、5、6 人の中国人の姿が映っている写真が何枚もあった。聞けば、子供が小さく旅行が難しい両親を気遣って、彼らが頻繁に一緒に旅行の計画を立てて同行し、子供の世話や言語面でのサポートをしてくれたという。また、父は日中関係について他の中国人社員とよく語り合ったという。それは決して敵対的なものではなく、お互いが国同士の問題についてどう思っているのかを知ろうとしている感じだったらしい。私はこれらの話を聞いたとき、自分が中国人の人情や懐の深さなどについて本当に何も知らなかったのだと思った。また、自分が無知であることに気づかずにいることの恐ろしさを知った。無意識のうちに持つイメージはときに私たちの考え方や捉え方を縛り付けて視野を狭めてしまうのだ。

修学旅行などで学校外に出るとき、日本人学校の先生から幾度となく言われた言葉がある。「自分は日本人代表だと思いなさい。」という言葉だ。その時は少し大げさだと思って

いたが、実際そうなのだ。多くの人が目の前にいる外国人の行動でその国のイメージを形作ったり、逆にその国のイメージや自国との関係からその国の人を捉えてしまったりしがちだ。それは仕方のないことなのかもしれないが、一人一人の考え方や行動は千差万別であり、国という括りではひとまとめになどできない。私は海外での生活を通してこのことを身に染みて感じた。

そして私は今、大学の第二外国語として中国を学んでいる。発音が難しく、日々四苦八苦しているが、家や学校で中国の文化に触れる機会は大きく増えたと思う。まだまだ実力不足ではあるが、いつか自分の肌で中国を感じ、ありのままの中国を見てみたい。

漢詩から広がる幻想的な世界

東京学芸大学
教育学部
西　梨花

夕殿蛍飛思悄然
弧灯挑尽未成眠

高校 3 年生のとき、通っていた習字教室で何度も何度もこの文字列を繰り返し筆で書いた。何を書くのかは先生が決めていて、生徒それぞれに漢文の言葉を選んでおり、私はこの言葉を選んでもらった。先生のお手本を見て、漢字やその並び方を見てなんて美しいのだろうと思った。お手本をもらった時、自分が静かで立派な屋敷にいて、眠れないままただ窓から蛍が飛び回るのを眺めているという情景が浮かんだからだ。綺麗で、でも少し寂し気なぼんやりとしたイメージを持ちながら字を練習した。筆の入り方、点の位置、字の形など、字を一文字一文字書くことに意識を集中させていくうちに、自分がどんな意味を持つ、何の言葉を書いているのか気になってきた。

調べてみると、白居易が詠んだ長恨歌という詩の一節だった。この詩は簡単に言うと、漢の玄宗が楊貴妃に入れ込んで国家を滅亡の危機にさらし、家来にその原因として楊貴妃を殺せと言われて殺してしまい、玄宗は深く後悔して、道士に頼り魂を探すという物語である。上の一節は楊貴妃を失った玄宗が家に帰ったが、どうしても彼女を思い出してしまい、またそこにいる人たちからも時の流れを感じられ、切なく悲しい気持ちでいる様子を表現している。「夕方の宮殿に蛍が飛んでいる。物思いは憂い悲しい。ひとつの明かりを灯し尽くしてもまだ眠れない。」というように。

自分が書いていた文字が玄宗の悲痛な思いを想起させる、儚く悲しい情景だったことを知って、それが長い物語の一部分だったことにも驚いた。なぜ先生は私にこれを選んだのだろうと思いながらも、筆を運ぶたびに自分の中で玄宗の様子と情景を思い浮かべた。自分の仕事を忘れるくらい愛していた、美しすぎる楊貴妃。亡くなった楊貴妃のことを四六時中考えてしまい沈みこんでしまう、玄宗。家に帰ると出てきた元のままだったが、女官や役者たちの老いや白髪が気になり、時が流れているのに自分だけが取り残されているような気持ちになってしまう。蛍が飛び回り命を燃やしながら幻想的な風景を描くのを見て沈んでしまい、空が明るくなってきてもまだ眠りにつくことができない。そんな苦しくて悲しい思いを抱えていた玄宗に想いを馳せて字を書いた。国語の授業で漢文を習っていたとはいえ、こんなにも入り込んで情景を想像したことや漢文の美しさを感じたのはこれが初めてだった。

私は大学で第二言語に中国語を選び勉強している。漢詩は古典なので現在使われている中国語とは異なると思うが、漢字の美しさや文字一文字から情景をイメージするおもしろさを感じた。また授業で発音練習するときに先生やクラスメートの発音や例文の読み上げを聞いていて、中国語は音や響きまでも綺麗だなと思った。中国語という美しい言語をも

っと理解して、自分で使えるようになりたい。大学生活の中でその美しさを堪能しながら中国語を勉強したいと思った。また中国の西安には華清池という玄宗が楊貴妃のために作った離宮が残っている。長恨歌では楊貴妃が温泉で美しい肌を洗っていた場面に登場する。長恨歌で描かれていた世界のように美しい絵画のような景観が広がっている。そんな長恨歌の舞台に実際に行ってみたい。詩の雰囲気を自分で体感しに行き、自分なりの長恨歌の世界を細かに想像して味わいたい。知識や思い入れのある場所に行くのは、何も知らないで旅行に行くよりも何倍も楽しいと思う。西安には歴史がたくさんあり、歴史スポットも多いことが調べていて分かった。壮大で迫力のあるスポットや、少し知っているという場所があり、どんな場所なのか、何があったのか背景知識を踏まえた上で訪れてみたいと思った。中国語の学習だけでなく、中国文化や歴史など自分の興味があることもどんどん調べて知識を蓄えて、現地に行って自分の世界を広げていきたい。

「大陸の風」

埼玉県立和光国際高等学校
外国語学科２年
増田　有真

２０２３年、夏、私は親戚のツテで中国内モンゴル自治区に訪れた。割れたアスファルトと砂利道を、かれこれ車は４時間走った。映るのは地平線まで続く青と緑。薄く広がる池には羊の群れや馬の群れが。朝のまだ低い太陽が、その水面に反射して美しい。ぶうんぶうん。風力発電機のそばを通った。流れる風景に見惚れた。

着いたのは親戚の所有するとてもとても広い草原。その土地の中央にゲルが有り、そこから見渡しても端に立てられた柵に視程は及ばない。飼育しているのは牛、羊、山羊。遠くには黒色の或いは白色のぽつぽつとした動くなにかが見える。初の光景、心が動かされるのにそう時間はかからなかった。壮観である。丘に立ち眼下を眺め、肺いっぱいに空気を吸い込んでは吐き、浄化されていく私の身体。８月の晴れた草の上、鋭い日差しに刺されながらも、からっと冷たい風がびゅっと。快い風は蒸した日本を忘れさせた。

「水やりの時間だ」彼らはそう言って大きなバイクにまたがりキックレバーを踏み込んだ。エンジンのけたたましい音。私は後ろに座るよう勧められ、水を今か今かと待ち望む群れのもとへ。昔は馬に乗っていたらしいが最近からバイクに変えたそうで、テレビ一つない草原にテクノロジーが押し寄せるのを感じた。といっても走るのはバイクの作った轍の上、さながらにして獣道だ。ホースから引っ張った水を長い水飲み場に注いでいた。近くには何の気配もない。群れで行動する彼らは水飲み場に自分たちでは来れない。まだ遠くにいる。ここから追い込みの必要がある。一匹もはぐれさせまいと全体を束ね水飲み場まで。バイクを縦横無尽に操り思いのままに蛇行させる技術。かつて大陸を支配した蒙古民族は、今日の中国において乗り物を変えていまだ実在か。そう、ふと思いついてしまった自分が可笑しかった。羊たちは我先にと口を水面につっこむてんやわんや。一方の首がもう一方の首に乗り上げ交差する光景に笑わずにはいられない。そんなことをまた次の場所へと繰り返された。都市の対義で、スローで自由なライフの刹那。

時間がゆっくりと流れる。すっかり現代の”あたりまえ”に慣れた私は、電波というもの無しに時間の潰し方など知らない。どうしようもなくなって空を見た。ステップ気候か、中学地理を思い出して、どうりで天気が良いわけだ。風が気持ちいいのだ。空ではもっとずっと風が速いんだろうか。雲があっという間に流れていく。思えば、じっくり見たことがなかった。日本はおろか世界のどこだって見える雲だ。目線を下にすれば、さらに初めて見る、私にとってこの上ない高揚感をもたらすものがそこにあった。雲の影。日本で雲の影の姿の全貌を見たことはなかった。雲の影の縁を確認した。黒と緑の明確な色の違いと明確なその雲の輪郭を確認した。私にはそれは神秘的に映った。雲の影は私の中で空を

泳ぐ白い鯨の影になった。まるで、虹の足を拝めたときのような胸の高鳴り。私は思わず駆け寄り、飛び込んだ。辺りはサーっと、視界も暗くなった。私はその中別世界を感じ興奮した。楽しい時間から、気づけば別世界の縁が迫る。私は逃げた。迫る方の反対へ走った。来ないでおくれ。もう少しここに居させておくれ。風に乗った鯨は無情に去っていった。私は立ち尽くした。

無常。世は無常なのだ。絶えず動き続ける家畜たち、食べられて生まれて、草は食べられてまた生えて。人はそう生きていくべきなのだ。Be water, my friend―― 水のように流れる。風のように去る。風立ちぬ、いざいきめやも―― 広大な中国の大陸は気づかせてくれた。今を生きよう。精いっぱいに、今を生きようじゃないかと。大陸の風が後ろから吹いて、背中を押している。

未来、私たちが創る

兵庫県立国際高等学校
２年
神谷　あかり

あの幻のような 9 日間は私の記憶に残り続ける―「Panda 杯全日本青年作文コンクール～わたしと中国」このポスターを目にした途端、私はあの広東省で過ごした 9 日間を鮮明に想い出し、当時の高揚感と恋しさで胸がいっぱいになった。この想いを、想い出を、感謝を、文章にして誰かに伝えたいと思った。

去年の秋、私は兵庫県と広東省の高校生交流事業の一環で 9 日間広東省に派遣された。一度は中止になったこの事業。再開すると発表があったものの、当時は冷え切った日中関係についての報道が相次ぐ時期だった。両親は私の身を案じてギリギリまで反対していたが、なんとか説得して応募した。私の中に日本人だから差別をうけるのではないか、という不安が無かったと言えば嘘になる。しかしこういう時期だからこそ、私たち高校生にできることがあると思った。

そうして訪れた中国広東省。そこで最初に友達になったのが思羽だった。彼女は現地の学校でペアとして、またホストファミリーとして迎えてくれた。学校の授業や休み時間の食堂、博物館見学、広東タワーへの観光など何処へ行くにも彼女と一緒だった。最初に会った時、私と彼女は似ていて 2 人とも恥ずかしがり屋なところがあったため、お互いに少し挨拶をして照れくさそうに笑った。その後中国の伝統的な円卓でお昼ご飯を食べている時、私はチキンが回ってくるたびにそれを取っていた。気づいた思羽は「チキン好きなの？私も」と言って笑った。彼女は私に顔を近づけて口を片手で抑えながら、とっても可愛らしく笑う。それからというものチキンが回ってくるたびに彼女は私のお皿にチキンを入れてくれるようになった。「チキンが好きならこっちの料理も好きなはず」と別の料理も取ってくれた。私は思羽の気配りや優しさに心底驚き、彼女が大好きになった。また、彼女は恥ずかしがり屋でおっとりとしていたが、同時に優しい強さも持っていた。一度、私は学校で知らない子から怒鳴られたことがあった。中国語が聞き取れなかったため、正確には何を言われたのか今でも分からない。しかし友好的な言葉では無かったように思う。その時彼女は今まで聞いたことのないような強い口調で言い返し、私にその場を立ち去るよう促してくれた。しばらくして「ごめんなさい。私はあなたが大好きだから、気にしないで」と言ってくれた。彼女の家族もまた、親切心溢れる人たちだった。言語の壁があり上手くは話せなかったが、いつも私に笑顔を向けてくれた。ご飯は美味しかったか、疲れていないかと何度も聞いてくれた。最後に「泊めてくれて、親切にしてくれてありがとう」と伝えると、元気よくアハハと笑って「また中国に来て、うちに泊まって」と言ってくださった。学校の生徒たちも、私たち日本人生徒を大変歓迎してくれた。学校についた時には、何十もの生徒が私たちを取り囲み、手を振り、話しかけ、連絡先を交換しようとしてくれ

た。私は正直こんなにも歓迎されるとは想像もしていなかった。どこへ行っても笑顔で「おはよう！」「ようこそー！」と知っている日本語で挨拶してくれ、その度に私は心が温かくなるのを感じた。

あれから約一年。改めて私は今、あの時受け取った多くの優しさや温かさ、笑顔に感謝してもしきれない想いでいっぱいだ。私たちはあの 9 日間で言語・文化の垣根を越え、お互いを似ていると思ったり違うと思ったり、思いやったり、笑い合ったりした。そうして近いようで遠いところに住んでいる友の存在を知り、友情を確認し合った。私は将来国際的な仕事がしたい。日本と外国を繋ぐ架け橋の様な存在となりたい。そう思うのはきっと、広東での経験があるからだ。私たちはあの 9 日間を通して今もなお、中国と日本の架け橋の一部となっているはず。そんな私たちが未来を創っていく。それが私たちの責任であり、願いである。私には眩い未来が見える。

大切なのは心と心の対話

福岡女学院大学
人間関係学部心理学科１年
下川　眞希

私には忘れられない言葉がある。題名にもなっている「大切なのは心と心の対話」という言葉だ。語学学習アプリで知り合った中国人女性が話してくれたもので、私の座右の銘になった。

この言葉が出てきたのは、彼女が中国語を教えてくれたときだった。私は語学勉強に何度も挫折していて、上達できずにいた。本場の発音を聞けば上達すると思い、レッスンを頼んでみると、彼女は快く依頼を受け入れてくれた。語学だけでなく中国の文化やニュースを教えてくれて、相談にも乗ってくれた。上達できずに悩んでいると彼女は、

「言語が話せなくても、現地に行けば心で伝わる。大切なのは心と心の対話だよ。」

と言葉をかけてくれた。日本で体験した人の温かさから出た言葉だと、彼女は教えてくれた。

日本のアニメが好きで大学進学の際、日本への留学を決意した彼女は、文化やマナーについて勉強したそうだ。しかし、実際に日本に来てみると独特のマナーが多いと感じたという。日本人は空気を読んだり、はっきりと意見を伝えなかったりするため、母国とのギャップに悩んだといい、日本人との交流では、懸命に文化を理解し、不快な思いをさせないよう努力したそうだ。私も初めて彼女と出会ったときは、直球で投げかけられる言葉に戸惑っていた。しかし、彼女と関わっていくうちに、本音を包み隠さず話してくれていることが分かった。私にとって彼女とのレッスンが、初めての異文化交流の時間だったと思う。

そして今、私は大学で中国語を履修している。本格的に中国について触れたいと思ったからだ。彼女と出会う前の私では考えられない行動だ。内気な性格の私が、多文化について学びたいと考えたり、コンクールに応募したり自分から行動することは一切なかった。彼女との出会いが、他国文化を意識するように私の考えを変えたのだ。彼女がアニメを好きじゃなかったら、彼女が母国に帰っていたら、私たちは出会っていなかった。出会えてよかったと心の底から思っている。彼女とのレッスンの時間で、私は心と心で繋がっていたと感じている。「国籍や文化、人種が違っても皆、心は同じものを持っている。」と彼女から学んだ。彼女が教えてくれた心と心の対話は、私の視野を広げ、見えるものすべてが新鮮で楽しい日々を過ごしている。

もう三年近く彼女とは連絡を取っていない。お互いにアプリを退会したからだ。今も日本で暮らしているのか、中国で元気に過ごしているのか、何も知らない。ただ、私の胸の中で日本について語る彼女の声が響いている。彼女も私と、心と心で繋がっていたと思っ

てくれていたら嬉しい。

成都の茶の間に宿る心のゆとり

ニューヨーク大学アブダビ校
公共政策学部４年
山野井　咲耶

　大学の研究助成金に採択され、私は四川料理の深層を探る旅に出た。
選んだ街は、ユネスコが「グルメ都市」に認定した四川省成都。そこで料理にまつわる口承を記録したいと思い、劉夫妻の家に身を寄せることになった。どこの誰とも知れない外国人を、なんの見返りを求めず、十日間迎え入れた二人には本当に頭が下がる。
夫妻の日課は、静かにお茶を啜りながら、本を読むこと。その穏やかな時間に、私は日記を綴り、夫婦に毎晩手渡す。そこに書かれた文字が私の感謝の気持ちを代弁していると願いながら。ここに、その日記から抜粋した一部を記してみたい。

六月二七日
　中国で一度もサラダを口にしていない。茹でた野菜や煮込んだ野菜はご馳走になるが、生野菜だけは食卓に並んだことは一度もない。奥さんが言うには、「生野菜は動物が食べるもの」という認識があるからだそう。「生野菜ってうさぎとかが食べるものでしょ。人間は野菜を調理するのよ。まあ外国人は生野菜を食べるけどね。」と、続けた。
中国人が生野菜を敬遠してきた歴史は、中国語にも表れている。中国語では、「生人」は見知らぬ人を指す一方、「熟人」は顔馴染みの人を意味する。つまり、中国の食文化における「生」と「熟」の対比は、単に調理法の違いだけでなく、文化的価値観に結びついているのだ。食卓に並ぶ一皿一皿を見つめていると、中国文化の奥深さが少しずつ見えてくる気がした。

七月三日
四川料理の書物を読み漁っていると、「毛氏紅焼肉」という料理が目に留まった。奥さんに聞いてみると、毛沢東主席が愛したことに由来するという。「実はこの紅焼肉は、蘇軾が考案したものなの。ちなみに彼は四川出身よ。」奥さんは何気に物知りなのだ。
蘇軾といえば、左遷され、絵画や詩に精通した北宋の文化人。その程度しか高校では習わなかったが、実は美食家としても知られる。そんな彼は『初到黄州』にて次のように記している。
自笑平生為口忙　　老來事業轉荒唐
長江繞郭知魚美　　好竹連山覺筍香
逐客不妨員外置　　詩人例作水曹郎
只慚無補絲毫事　　尚費官家壓酒囊

　この詩から、左遷先で食材を楽しむ蘇軾の姿が浮かび上がってくる。そんな彼が地元の豚や酒を使って編み出した料理が、地元の人に愛されるようになったという。紅焼肉と名付けられたこの料理は、時を経て毛氏が気に入ったため毛氏紅焼肉として広く親しまれることになったらしい。蘇軾は逆境にありながらも、その土地の食材を楽しみ、創意工夫を凝らして新たな料理を生み出す心の余裕を持ち合わせていた。たった一品から彼の生き様を感じ取ることができるのはまさに食文化研究の醍醐味だと思う。

七月四日
　日本では、多忙であることが美徳とされ、「エリート」としてもてはやされる。

しかし、歴史を遡ると、エリートとは余暇を享受する層を指してきたはずだ。労働は奴隷や労働者に任せ、膨大な時間を詩や絵画などの創作活動に勤しむ時間に充てる。それがエリートの真髄だった。しかし近代に入り、経済成長が神格化されると、この図式は一変する。多忙な人を美化すると同時に、余裕のない自分自身を自嘲しつつも、どこか誇りを覚える。強烈な違和感を覚えつつ、疑う余裕さえない。
ここ成都では、いい意味で人々から活気が感じられないのだが、かといって諦観で溢れているわけではない。平日の昼間から麻雀に興じる半裸のおじさんや店の前で椅子を広げ談笑するおばさん。見返りを求めずに外国人を居候させ、毎晩ゆっくりお茶を愉しむ余裕のあるご夫婦。成都人からは、常に余裕が漂っている。
　私はこの街で、一切の予定がない。アルバイトの予定もなければ、友人と遊ぶ約束すらない。街を散策し、この日記を書き綴るだけだ。そんな私は、蔑まれるべき存在かもしれない。だが、その蔑みをも静かに受け入れることこそが「エリート」の義務なのだと、中国で気付かされた。
　今日が居候最終日。旦那さんが毛氏紅焼肉を作ってくれた。好吃！

「日本の多文化教育から見た中国」

東京学芸大学
教育学部初等理科教育専攻１年
鈴木　大

　私の中で、中国という国はとても身近な国です。小さい頃からニュースで中国のことについてはたびたび取り上げられていたし、小学生の頃の担任の先生は三国志がすごく好きな人だったので、授業ではよく三国志の話を聞いていました。私が最も三国志の中で好きな人物は、魏の基礎を築いた曹操です。曹操は、劉備やその部下である関羽、孔明、張飛らの前に立ちふさがる冷酷で残忍な悪玉としても描かれることも多いですが、洛陽ではるかに身分の高い皇族を断罪したり、黄巾の乱で黄巾の者たちを自らの民にしてしまったりと並外れた器の大きさにはとても感心します。
　また、日本で生活していると中国人に度々会うことがあります。観光地に行けば中国人の観光客に会うし、電車に乗っていると中国語で話している人を見かけます。私がまだ幼かった頃、近所に中国人の家族が引っ越してきた際には、一緒にバーベキューをして楽しんだこともありました。
　私が教育学部の大学生になって、国際情勢についても小さい頃より深く考えられるようになり、学校教育や多文化教育などについて勉強するようになってからは、中国という国はただの身近な国という認識ではなくなりました。日本の学校現場には、外国にルーツを持つ学生が一定数います。このような生徒の半数近くは、中国にルーツを持っているということが統計から分かっています。彼らの抱えている問題は一人一人異なりかなり複雑です。外国にルーツを持つ生徒たちは、学校では日本語でコミュニケーションをとりますが、家に帰ると中国語を使って両親と会話をしている学生も多くいます。このような生徒の中には、日本語で言いたいことを伝えたいのに、両親が中国語しか話せないために自分の言いたいことを 100%伝えられなかったり、自分が何人であるのか自分のアイデンティティがどこにあるのかなどで深く葛藤し、苦しんだりする生徒も多くいます。苦しんでいるのは生徒だけでなく、生徒の親も自分の子供が中国語を話せなくなっていることに戸惑い、我が子との意思疎通ができなくなることに不安を感じていたりします。そして、我が子の高校への進学や進級などの書類、生活を行う上で必要な手続きは日本語で書かれ、日本語で作業しなければならないものも多くあり、とても大変です。日本の教育現場では外国にルーツを持つ生徒やその保護者を支援するサポートは十分であるとは言えず、彼らを支援する人材が必要不可欠です。これらのことから私は、大学の第二言語の授業で中国語を履修

することを決め、将来中国にルーツを持った生徒やその保護者と、少しでも中国語を使ったコミュニケーションができるようになるよう日々中国語の学習を続けています。中国語を上達させるためにも、一度は中国に旅行に行ってみたいなと思っています。また、中国はアジアを語るうえで欠かせない国であり、日本の重要なパートナーです。日本と立場が異なる場面も多くありますが、互いに尊重し合い相手の意見に耳を傾け続けることは非常に重要です。そのような状況で、国と国だけでなく、人同士の個人的なつながりが強くなっていくことは大事だと私は考えています。私は今後、自分が身につけた中国語を使って、中国人の方とも積極的に交流していきたいです。中国人の方と交流することで、きっと自分にはなかった考え方や新しいものの見方を育くむことができると思います。少しでも曹操のような器の大きい人間になれるよう、一つの考えに固執せずいろんな人の考えを尊重し、受け入れられるような姿勢をこれからも持ち続けたいと思います。

「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2024」
★入賞

模範たる旺盛な競争心

トヨタ自動車株式会社
電池製造技術部
丸山　大貴

異文化共生が進む現代社会において、多様な文化背景を持つ人々が同じ職場で働くことは、もはや特別なことではなくなりました。日本の製造業においても、外国人社員の採用が増加し、さまざまな国から来た社員が一緒に働いています。その中でも、私が特に感銘を受けたのは、中国人社員たちの「模範たる旺盛な競争心」です。
私が初めて中国人社員と一緒に働くようになったのは、3 年前のことです。彼らは、日本での就労経験がほとんどないにもかかわらず、仕事の進め方や日本語の習得に対して非常に高い意欲を持っていました。その姿勢は、私を含む日本人社員にとっても刺激となり、学ぶべき点が多いと感じました。

まず、彼らの技術へのキャッチアップの速さには目を見張るものがあります。製造業では、日々進化する技術や新しい製品開発に迅速に対応することが求められますが、中国人社員たちは、どんなに複雑な技術でも、自ら進んで学び、短期間で習得する姿勢を見せます。例えば、新しい生産ラインが導入された際、彼らはマニュアルや資料を徹底的に読み込み、すぐに実践し従来知見・得た知見を活かし成果を上げています。そのスピード感と積極性は、私たち日本人社員が見習うべきものであり、彼らが持つ競争心の現れでもあります。

また、勤勉さという点でも、彼らの姿勢は際立っています。長時間労働や細かな作業が続くことが多い製造業において、彼らは決して怠けることなく、常に高い集中力を保ちながら仕事に取り組んでいます。特に、ミスが許されないような精密な作業においても、彼らは一切の妥協を許さず、完璧を目指して取り組む姿勢を見せます。その結果、彼らが担当するプロジェクトや生産ラインの品質は常に高水準を保っています。このような勤勉さと責任感は、私たち日本人社員にも多大な影響を与え、職場全体の士気を高めています。
さらに、言語の壁を超える努力も彼らの競争心を示す重要な要素です。日本語は中国語とは異なる言語体系を持ち、習得には多大な努力が必要ですが、彼らはその困難を乗り越え、日常会話や業務上のコミュニケーションにおいても、流暢に日本語を使いこなしています。特に、専門用語や業界特有の言い回しについても、彼らは積極的に学び、自らのスキルとして取り入れています。これにより、彼らは日本人社員とのコミュニケーションの円滑化に寄与し、チーム全体のパフォーマンス向上にもつながっています。

以前、設備トラブルが起きた際、ネイティブの私すら読むのがためらわれる分厚いマニュアルをいの一番に中国人技術者が読み始めたことがありました。自分自身の仕事に対する姿勢を深く反省し、一緒になってマニュアルを読み、問題の根本を解決したのは特に印象に残っています。彼らの姿勢を見ていると、単に外国人社員として日本の文化や慣習に順応しようとするのではなく、自らが持つ能力や知識を最大限に発揮し、職場での地位を確立しようとする強い意志を感じます。彼らの健全な競争心は、私たち日本人社員にとっても大いに刺激となり、互いに切磋琢磨することで、職場全体の成長を促進しています。

結局のところ、異文化共生は単なる共存ではなく、異なる文化や背景を持つ人々が互いに影響を与え合い、共に成長していくことが求められます。中国人社員たちの模範たる旺盛な競争心は、その象徴的な存在であり、私たち日本人社員にとっても、大きな学びと刺激を与えてくれるものです。このような異文化共生の中で、私たちも彼らから多くを学び、自己成長を遂げることで、より良い職場環境を築いていくことができると確信しています。

文化で手を取り合う未来

灘高等学校
１年
小森　龍太郎

僕には中国人の親友がいた。僕は中国語を話せるわけではなく、彼女も日本語があまり得意ではなかったので、コミュニケーションは英語で行っていた。彼女はいつも笑顔で、聞き上手だった。

ある日突然、一緒に書道をしよう、という話になった。その日、夏の太陽が照り付ける縁側で、僕達はひたすら字を書いていた。
最初はお互い好きな熟語を書き、見せ合った。最初の彼女が書いた熟語は「四海皆兄弟」だった。素敵な人だ。僕は少しかっこつけて「百花繚乱」と書いた。今思うと少し恥ずかしいチョイスだった。意味を聞かれてもうまく説明できず、君みたいな人を表す言葉を書いたんだ、と投げやりに言った。日本語だからばれないと思ったが、冷静に考えてみたら漢字の意味で何となく分かってしまうと気づき赤面。彼女は小悪魔的に笑っていたようにも見えた。その笑顔に、また惹かれてしまっていたのは内緒だ。

そのあともたくさんの字を書き、それらについて会話をした。お互いの名前の由来だったり、中国独自の漢字についてだったり、日本のひらがなについてだったり。僕達は書道という文化を通して会話をしていた。互いの文化を尊重し、自らの文化に誇りをもって知ってもらおうとする、その空間がとても心地よかった。

僕は模擬国連という競技で中国として戦って以来、中国のことが大好きになった。改めて日本の文化・社会は中国とのつながりであふれている。

僕は中国史についてもとても興味があり、始皇帝の時代、三国志、そして近代史が特に好きだ。原泰久先生の「キングダム」は至高の名作で、何度も読んで影響を受けている。文化的に見ても、中国史を日本が誇る文化である漫画で描き、大成功を収めている。日本と中国の文化的な架け橋になれる力を持っていると思う。

また、僕は中国のボードゲームが大好きだ。中国といえばやっぱり麻雀だろうか。麻雀も日本でとてもポピュラーだし、最近は「雀魂」という麻雀ゲームが日本で大流行している。また、僕は現在将棋に関して色々な研究アプローチを行っていて、「象棋」についても興味があり、実際に論文を書いている。囲碁も古代中国に起源があると知り、僕はボードゲームから中国の壮大な歴史と文化を体感し、その魅力の虜になっている。

現在、世界は全ての国が協力できている状況ではない。この現状は、国籍での人間の差別化の意識につながってしまっている。「～人は～だ」、日本でもたまに聞こえてきてしまう。国が敵対している事実だけで仲良くできない人たちが、沢山いる。留学でも、そんな悲惨な事実を体感した。

だけど、人と人は繋がれるはずだ。互いの国にどんな背景があっても、それを無視して一人の人間として接すればいいだけ。そんな簡単なことができない人達を実際に見ると、本当に悲しい気持ちになってしまう。

あの夏、僕が経験したような、互いを尊重し合えるコミュニケーションが生まれる、理想の空間。世界中の人々がそれを作り出せる材料を持っている。それが文化だ。
たったひとつでもいい、共通の文化を通して同じ空間を共有すれば、僕達は国籍も、人種も、言語さえも超えて簡単に手を取り合えるはずだ。エンタメでも、娯楽でも、学問でも、スポーツでもいい。この作文コンクールだってその一つだ。文化が持つ力に頼って、一人一人の思いが詰まった「声」が、少しずつ大人数の「輪」になって広がっていく。「輪」は、新たな社会の「波」を生む。どんどん大きくなっていく「波」が、世界に、冷めてしまっている国同士の関係性に内側から影響を与えられるのではないだろうか。
この一学生の小さな「声」が誰かに届けばいいなと思う。「声」は大きくなって、やがて「波」になると信じている。

例えば、敵対していた国が同じ卓を囲み、談笑しながら麻雀を打つ未来。この作文はそんな未来に向かいたい僕なりの初めの第一歩だ。

未来へのバトンパス

東京学芸大学
教育学部中等教育専攻書道コース１年
廣澤　愛佳

―令和５年 12 月、国の文化審議会は国連教育科学文化機関(ユネスコ)無形文化遺産の候補に「書道」を選定した。私はそのニュースを待ちわびていた中の一人である。書道の輪がさらに広がってほしいと願う私にとってとても嬉しいニュースだった。書道を始めて早 13 年、私は現在、大学で書道を専攻している。将来は高校芸術科書道の教員になりたいと考えている。私が書道を始めたのは、小学１年生の時だ。祖父に習い毎月作品を出品していた。ただただ筆で文字を書くことが楽しくて、書道をしている時はいつも時間を忘れて没頭していた。その頃はまさか自分が書道の道に進むなんて考えもしなかっただろう。高校で書道部に入り、恩師と出会い、恩師の勧める顔真卿という書家の古典に目を奪われたことを覚えている。顔真卿は中国の初唐に活躍した書家であり科挙官僚という政治家でもあった人物である。彼は、蚕頭燕尾と呼ばれる起筆は蚕の頭のよう、収筆は燕の尾のように書く筆法を生み出した。力強く重厚感の感じられるどっしりとした書体でありながらも、その中に柔らかさと包み込むような優しさを兼ね備えた筆跡はまさに彼にしか生み出すことのできない筆法であったといえる。私はこの顔真卿の筆法に惹かれ、高校では顔真卿の自書告身帖、祭姪文稿などを中心に臨書を行った。中国書道史や顔真卿について詳しく学ぶうちに、いつか私も中国に行って西安碑林博物館で石碑を見て、日本書道の先駆けとなった本場の中国の書を自分の目で見たいと強く思うようになった。また、それと同時に私は、中国に行って書道の魅力を再発見し、書道の良さを後世に伝えたいという思いがある。私は以前、地元の栃木県宇都宮市で行われた書道展を見に行った際に、その書道展を見に来ていたある先生から言われた言葉が今でも忘れられない。「書道の教員になる覚悟はあるの？」この言葉を言われた直後、私は声が出なくなった。どういう思いや真意でこの言葉を発したのかは分からない。その先生も別に書道教員になることをやめさせようとしたわけではないと思う。しかし、その単刀直入な言葉を前に答えられない自分がいたことも事実だった。現代社会では、AI 技術の発達によりスマートフォンやタブレットが普及し、そういったインターネットと隣合わせの便利な生活を送っている。その一方で、書道のように筆と墨を使って文字を書くという行為自体少なくなっていると感じる。書道人口も高齢者が圧倒的に多く、書道は一昔前の趣味の一つとして捉えられており、若手が少ない状況だ。書道教員になろうと夢を追う今、果たして書道に需要はあるのだろうかと自身に問う毎日。それでも私が書道の教員になりたいのは、私自身書道が大好きで、中国書道から日本書道へ受け継がれてきた技術や文化そのものを守りたいからである。中国の書道は、文字の成立から篆書、隷書、草書、行書、楷書と書体の変遷を確立し、数々の有名な書家が中国書道の基礎を作り上げてきた。原点に立ち返ると、中国で文字の成立がなければ、そもそも日本に文字は伝わっていなかったし、今のように漢字があってはじめて存在する日本語も生まれていなかったかもしれない。そして何より、中国は文化を敬愛する意識が強いと私は感じる。中国書道が色褪せることなく、今まで続いているのは、その時その時の時代で中国書道文化を次の世代へ受け継ぎたいと願う同志たちによって、その文化や芸術が生きているからであると考えられる。それはまさに時代の垣根を超えたバトンパスだ。孔子の論語の一つに、「故きを温ねて新しきを知れば、以て師たるべし」、昔のことをよく調べて学ぶことで、現在や未来に役立つことがよくわかるようになるという言葉がある。

私もこれから大学４年間で書道を探求し、憧れの中国でさらに自分を磨きたい私の未来へのバトンパスはもう目の前に迫っているのだから。

「華流」の美に魅せられて

明治大学付属明治高等学校
３年
田中　優香

私は今、高校で中国語を履修している。中国は広大な土地を持ち、人口も多く、五十を超える民族が存在する。そのため、英語に加えて中国語も学ぶことでコミュニケーションを取ることができる人がさらに増えると思ったからだ。自分にとって新しい言語を学び始めるのは久しぶりで、楽しく授業を受けている。さらに、予期せぬ収穫として中国での生活の話を伺うこともある。一衣帯水の中国に対しての親近感はどんどん大きくなっていった。

また、今年は四年に一度のオリンピックの年で、とても楽しみにしていた。私はバドミントン部に所属している。バドミントン女子ダブルスの準決勝では、中国の谭宁･刘圣书ペアと日本の志田･松山ペアの白熱した試合に目を離せなかった。卓球や体操などの競技において中国は昔から安定した実力を保っている。スポーツが強いのも中国の魅力の一つだ。今回のオリンピックでも多数のメダル獲得数を誇っている。しかし、中国の一番の魅力を聞かれたら、私は迷わず「ドラマ」と答えるだろう。

中国のドラマは華流ドラマと呼ばれ、最近は韓国の韓流ドラマと並び人気が出ている。華流ドラマには、現代の中国人の生活を感じることができる現代ドラマと、武術を習得した武術家たちの世界を描いた武侠ドラマや実在しない世界を描いたファンタジー時代劇などを含めた時代劇がある。日本の時代劇は史実に忠実で堅いイメージがあり若者の視聴者は少ないが、中国の時代劇はタイムリープ物やフュージョン史劇も多く、歴史に興味がない人でも楽しめる。三年程前に華流ドラマを見始めた時は中国の歴史にあまり興味はなかったが、史実を知らなくても見応えのあるものばかりで、私はすぐに中国時代劇の虜になった。

私が一番好きな作品は、「云之羽」だ。主人公は暗殺組織である無鋒の一員、云为衫。仕事がうまくいけば自由を手に入れられるという約束の元、敵組織である宮門に花嫁候補として潜入する。任務を遂行しなければ死ぬ状況で、感情を押し殺しながら自由を得ようと奮闘するという内容だ。好きなアイドルの虞书欣が出演しているという理由だけで見始めたが、最初から最後まで次の展開が見通せず、手に汗握る緊迫した状況の連続だった。どの場面も建物や自然などの世界観が非現実的で美しく、すぐにドラマの世界に引き込まれた。この作品に限らず、時代劇のワイヤーアクションやCGを利用した舞台空間演出は日本のドラマではあまり見られず、新鮮な表現にとても魅了された。さらに、どの作品も衣装が豪華絢爛で美しく、とても魅力的だ。伝統衣装はその国の文化や風習、歴史的背景を表すと言われているが、中国の場合はまさにそれが現れている。絹でできた美しい服、艶のある耳飾り、多彩な髪飾りなどからは中国四千年の悠久の歴史や多様な文化を垣間見ることができる。

華流ドラマは、その美しい映像と面白い内容で世界中の人々を惹きつけ、中国の魅力を世界中に伝える窓口として、ますます注目を浴びている。娯楽という要素だけでなく、中国の歴史や哲学的な思想、文化などの教養的な部分も楽しみながら知ることができる。私たちが見慣れている日本のドラマも国内外に人気があるが、そんな日本のドラマと比べても、壮大なスケールと華やかな映像が際立って見えるのは華流ドラマの魅力かもしれない。さらに、華美な雰囲気の中にも、日本人の私でも共感できる上品さを持ち合わせている。そのような中国の美の正体はなんなのだろうか？そうしたことを考えながら、これからも

より一層中国語学習に力を入れていきたい。また、ドラマを字幕や吹替なしで見たり、いつかは中国を訪れて実際に撮影に使われている建物や漢服を見たりしたい。私の中国への探究心はこれからも広がっていくだろう。

偏見から尊敬へ

静岡文化芸術大学
文化政策学部国際文化学科２年
青山　萌

中国と聞いて皆さんはどのようなイメージを抱くだろうか。中華料理のイメージを抱く人、長い歴史のイメージを抱く人、あまり良いイメージを抱いていない人、と人により抱くイメージは様々だと思う。そんな多くのイメージを持たれている中国に対して、私はストイックな国というイメージを抱いている。それは、私の認識を変えてくれた様々な中国文化や人の中に、並々ならぬ努力の跡を感じ取ったからだ。

私がそう思うようになった最大の理由は、とある動画に出会ったことにある。ちょうど高校を卒業し、大学入学を控えた春休みに出会ったその動画は、中国の獅子舞についてのものだった。それまで私は中国に対していいイメージを持ち合わせておらず、中国の名を聞いただけでその話題に懐疑的になってしまっていた。コロナ禍という状況も相まって、中国を一種の訳の分からない怪物のようなもの思い込んでいたのだと思う。

しかしこの動画は、その固定観念をいい意味で打ち壊してくれた。動画の中には、目標のためにひたむきに練習する人々と、驚くような芸術技巧の数々があったからだ。自分の背よりも高い棒から棒へと飛び移る、一人だけでも大変な行為を二人同時に、しかも重量のある被り物を持ちながら行う姿に深く感動したのを覚えている。しかし中国獅子舞の凄さはそれだけではなく、その演技力にも目を見張るものがあった。獅子が瞬きをしたり、しっぽを動かしたりと実際に生物として行うであろう行動を自然に行っていたのである。芸能に詳しくない私でも、この域に達するまでは相当の修練を積んだのだと思い描くことができた。

動画を投稿した人にはそんな意図など無かったと思うが、この動画を見た日から、私の中で中国は怪物のような国ではなく、超人的な努力を行う芸術の国という認識に変わった。しかし中国文化に対する偏見は壊れたものの、当時の私の中には中国人に対する恐怖がいまだ残っていた。それを無くしてくれたのが、とあるゲーム内で出会った采さんである。そのゲームは世界中の人と交流できるのが魅力であり、私もゲーム内の交流所で采さんと出会った。中国人ということでおっかなびっくり交流する私に対し、采さんは常に優しく手助けをしてくれていた。

そのおかげで、最初は采さん抱いていた恐怖心も、交流を続けるうち次第に消え去っていった。次いで強く感じたのは、この人も自分と同じなのだなという思いであった。中国で暮らしているからと言って、根本的な考え方が変わるわけではない。ご飯が美味しければ嬉しいし、友人の住む場所に災害があれば、国が違おうが心配する。そんな人間として大切なことを、采さんは私に強く思い起こさせてくれた。

ゲーム内でも、人生においても私の先輩だった彼女は、自分に対して非常にストイックだった。仕事をしながら大学へ通い、さらには資格の勉強をするといった、自分ができるところまでとことんやる姿勢は私の中で大きな憧れとなっている。

文化的な面での発見と、対人的な面での気づき。

そんな二つの出会いが私の中国に対する偏見を砕いてくれたからこそ、中国についてもっと知りたいと考え大学で中国語を学ぼうと思えたし、今まで表面しか見てこなかった中国という文化の根底にある努力家な側面を垣間見ることが出来たのである。

確かに現在の中国が、国際情勢における大きなポイントになっていることは否めないし、両者間で分かり合えない問題もあると思う。しかし、私たちが思ってしまっている怪物のような「中国」は存在せず、そこには必ず尊重しあえる文化があるはずだ。そんな興味深い中国の事を過去の「私」のような人々に紹介することで、中国に対する偏見を無くし、少しでも中国へのイメージが変わればいいなと思う。

中国の友と共に成長

慶應義塾高等学校
２年
本間　丈太郎

「先生、その解説は納得がいきません。ゼロの概念として…」

教室内に響くこの言葉は、蘇くんが初めて僕に強烈な印象を与えた瞬間だった。彼は物事を率直に述べる性格で、授業中にその特徴が顕著に現れていた。先生の説明に疑問を感じると、彼は躊躇せず次々と質問を投げかけ、その結果、授業がたびたび中断することが多かった。クラスメイトの中には「また蘇が始めたな」とため息をつく者もいたが、蘇くんは全く気にしていないようだった。

そんな蘇くんに対して、最初は驚きや戸惑いがあったものの、次第にその強烈な印象に惹かれるようになった。ある日、思い切って彼に話しかけると、意外にもフレンドリーに接してくれた。彼との会話を重ねるうちに、彼のきつい言い方や正直さに戸惑うこともあった。例えば、「なぜお前は彼の間違いを明確に指摘しないんだ」と問い詰められた時には、笑ってお茶を濁す方が楽だと思う自分との違いを感じずにはいられなかった。

しかし、そんな彼の厳しい一面とは裏腹に、彼は誰よりも努力家だった。朝から晩まで勉強に励み、塾に通い、寝る時間を惜しんでまで知識を吸収しようとしていた。その努力を自分では満足していないようで、常に向上心を持ち続けていた。僕は感服せざるを得なかった。

蘇くんの行動や性格の背後には、中国人の彼の家族や文化が大きく影響していることを知った。蘇くんの家には家訓があり、それは「金はかけるもの」というものだった。彼の家族はお金をかけることを美徳とし、良いものに対して積極的に投資する考え方を持っていた。この考え方は中国全体に広く見られる特徴だそうだ。

中国では、教育や健康、芸術などに対して積極的にお金をかけることが多い。良い教育を受けるために高額な授業料を支払い、健康を維持するために高品質の医療サービスを利用する。これらは未来への投資と考えられ、自己の価値を高める手段と考えているそうだ。

一方で、日本では伝統的に「タンス預金」という言葉が示すように、現金を家に保管し、節約を重視し、お金をかけることに対して慎重な姿勢を持つことが多い。将来の不確定要素に備えて貯蓄を優先する傾向が強い。蘇くんの家族の家訓と中国の文化を知り、彼の性格や行動の背景が理解できた。

中学校で知り合った蘇くんの影響で、僕は高校で中国語の授業を選択することにした。中国語の文法は日本語と違って明確に伝えやすい言語だと知り、これも蘇くんの率直な性格の土台になったのかな、と考えるようになった。ある日、僕が四音の発音で苦労していると、蘇くんは口の動きと発音をゆっくり丁寧に説明する動画を作ってくれた。どうにもうまく発音できない僕はすぐに諦めそうになったが、彼は僕のことを諦めず、粘り強くサポートしてくれた。彼は自分のことのように、友人の僕を決して見放さずに、僕の向上を支えてくれた。

蘇くんとの関わりは、僕に多くのことを教えてくれた。彼の率直さは時に厳しく感じられることもあったが、その裏には真摯な思いと信念があった。彼の言動から、中国の文化や価値観を学ぶことで、自分自身の視野が広がったのだ。彼の努力家な姿勢を見ることで、僕も自分の目標に向かって努力することの大切さを再認識した。

さらに、彼との付き合いを通じて、日本と中国の文化の違いについても深く考えるようになった。お金に対する価値観や使い方、家族や友人との関係性など、多くの面で違いがあることに気づかされた。それは決して一方が優れているということではなく、異なる背景や歴史が作り上げた価値観の違いであることを理解した。

彼の存在は、僕にとって大きな刺激となり、自分自身の価値観や行動にも良い影響を与えてくれた。彼との会話を通じて得た知識や経験は、僕の人生において貴重な財産となっている。今後も彼との交流を続けることで、さらに多くのことを学び、自分自身の成長を追求していきたいと思う。

「心」の架け橋

慶應義塾大学大学院
システムデザイン・マネジメント研究科修士１年
水口　綾人

コロナ禍が訪れる少し前のこと、私は北海道の登別にあるテーマパーク「登別マリンパークニクス」を訪れた。入園するとすぐに、驚きの光景が目に飛び込んできた。なんと、200 人を超える中国人観光客で園内が賑わっていたのだ。彼らは、楽しそうに写真を撮り、笑顔で家族や友人たちと過ごしていた。その活気に満ち溢れた様子は、どこか心を弾ませるものであった。お昼のイルカショーが開場すると、彼らは、ぞろぞろと会場に入り、一人ひとりがしっかりと席を詰めて座り始めた。その整然とした振る舞いに、私は感銘を受けた。彼らは、まるで事前に打ち合わせをしていたかのように、無駄なスペースを作ることなく、座っていたのだ。これは、日本人である私たちが見習うべき思いやりの精神であろう。きっと日本人なら、ついつい隙間を空けて座ってしまい、会場に人が入りきらなくなってしまうところである。ショーの最中、私は観客代表としてイルカの指揮をとる役を任された。緊張しながらも、手を掲げてイルカに合図を送り、その通りにイルカが鳴くと、盛大な拍手が響き渡った。それは、中国人観光客たちからの称賛の拍手であった。この一連の出来事は、中国人たちの思いやりと温かさを感じるだけでなく、文化や言葉の壁を越えて心が通じ合う瞬間でもあった。

その一方、日本では公共の場での他者への思いやりが十分でないと感じることが多々ある。例えば、電車での席の座り方にしても、隣に人が座れないように小さなスペースを空けて座ってしまう光景がよく見られる。また、周囲の目を気にして直接的なコミュニケーションを避けることも多いことから、席を譲らない人も少なくない。実際、ご高齢の方やヘルプマークを付けた方で、座りたいのに座れないという経験をした方はたくさんいるという。

このように日本と中国で思いやりの差が生じてしまったのは、文化的背景の違いに起因するところも大きいと私は考える。登別での中国人観光客たちの集団行動から察するに、中国では集団主義が強く、人と人との結びつきを大切にする文化が根付いているため、自然と他者を思いやる行動が生まれるのであろう。一方で、日本では個人主義が強く、個人の自由やプライバシーを重視するあまり、他者との関わりを避けがちである。その結果として思いやりの欠如が目立つことがあるのであろう。

実際、私が登別で目にした中国人観光客たちの行動は、まさにその思いやりの精神を象徴していた。彼らのように、他者を気遣う行動が日本でも見られるようになれば、私たちの社会もより温かいものになるのではないだろうか。また、日本人は中国人に対してあまり良くない偏見を抱いている傾向があるが、日本人が中国人から学ぶことはたくさんある。まさに、この思いやりの精神は学ぶべきであり、それを日常に取り入れることで、日本の社会はもっと豊かで住みやすいものになるのではないかと私は考える。

最後に、日中の文化交流は、登別での出来事のように両国の人々の「心」を繋ぐ架け橋として機能すべきであると私は考える。そして、その「心」の架け橋を渡ることで、私たちは偏見の壁を取り払い、お互いに学び合い、成長することができるのである。今後も、私は異なる文化の人々との交流を通じて、共に歩む未来を築いていきたいと願ってやまない。

中国が私に与えてくれたこと

会社員
阿部　千穂子

東京の街中で中国語が聞こえてくると私は耳をすませてみる。何か困っていそうだったら中国語で話しかけてみる。相手は驚いたように「你是中国人吗？」と聞いてきて、私は「我是一个爱中国的日本人」と答える。

人見知りの私だが、中国語を話すときは少しフレンドリーになれるのはなぜだろうか。きっと中国での生活の中で、多くの中国の方に出会い、学び、助けられてきたからだろう。

私が中国を意識するようになったのは大学生の時だ。父が広州に駐在していたため、夏休みを利用して父のもとに遊びに行った。現地の語学学校に通ったのだが、先生たちは私を妹のように可愛がってくれ、一緒に買い物に行ったり、家に招待してもらったりした。私は中国語を学ぶ面白さと中国の方の優しさを知った。

大学を卒業し、私は「テクノロジーの力で世の中を豊かにしたい」という思いでＩＴ企業に入社をし、2018 年から２年間、上海で仕事をすることになった。

●中国での日常生活のこと

現地での生活の中で一番驚いたのはスマホアプリの便利さだ。今では日本でもキャッシュレス決済が普及しているが、当時はまだ現金が多く使われていた。しかしながら中国では大都市でも田舎の町でも、老若男女が当たり前のようにスマホで買い物を楽しんでいた。また、支払いだけでなく、タクシーの配車・デリバリーサービスなど、生活に関わるほとんどのことがスマホ一つで完結でき、私は衝撃を受けた。

なぜこんなにも技術がすばらしく、さらに人々に受け入れられるサービスが作れるのだろうか？中国の方と一緒に仕事をする中で気づいたことがある。お客様にサービスを導入する際に「まずはトライアルをしよう」「皆の意見を聞き、何か問題があったら、すぐ改善しよう」といって、サービスを開始し、どんどんと良いものに変化させていったのだ。慎重に進める日本との違いを感じた。

実際に私が利用していたスマホアプリについても、導入当初は課題が多かったが、利用する人の意見を取り入れながら、改善を繰り返していったという。中国の新しいことを素早く受け入れ、柔軟に改善をしていける文化があるからこそ、技術発展が早く、老若男女、そして外国人の私までも簡単に便利な生活ができるサービスができたのだと感じた。

●中国旅行のこと

私は何度も中国国内旅行をしたのだが、広い国土故にその土地ごとに異なる街並み、食文化があり、世界旅行をしているかのようだった。

1 度、中国の若者限定の団体旅行に参加した。初めて出会う 20 人ほどの中国の若者と 1 週間ほど甘粛に旅行をした。日本語を話せる人は一人もおらず、初めはとても不安だったのだが、そんな不安はすぐに吹き飛んだ。行動するときはいつも誰かが話しかけてくれ、私が困っているとすぐに助けてくれた。

１番印象に残っているのは、移動中の大型バスでカラオケをした時だ。私が中国の歌を歌うと皆が手拍子で盛り上がってくれ、そのあとに全員で日本のアニメの主題歌を歌ってくれたのだ。今でもその主題歌を聞くと、中国の友人たちの愛情深さを思い出し、涙が込み上げてくる。

中国での生活は、私の人生の中でかけがえのない経験であり、その後の生活に多くの変化と楽しみを与えてくれた。

帰国後は「中国のスマホ決済の便利さを日本でも広めたい」と感じ、スマホ決済サービス部門の営業となった。今はAI等の先端技術を取り扱い、世の中に広める部門に属している。
また、今でも週に１度中国語の教室に通っており、先生とは、最近あった話、中国の昔語、最新のAIや自動運転のニュースなど幅広い話題をおしゃべりし、まさに語学を通して中国文化や先端技術を学ぶことができている。
「中国と日本、どちらにも良い面も悪い面もあり、それを知ることが大事」これは先生がいつも言う言葉だ。これからも、中国の文化、技術、そして人を知ることで、私自身が成長し続けていきたいし、両国がともに成長し続けていくことを願う。

明日はもっと良くなるだろう

佐賀県立佐賀北高等学校
普通科３年
久保　百花

小さい頃から、人付き合いが得意な方ではなかった。特に小学生の頃はクラスメイトから疎外され、いじめを受けていたこともあり、まだ広がってもいない自分の世界でもがき苦しんでいたことを覚えている。人数が少ない一学年一クラスの小さな世界だった。
そんな私に、世界はもっと広くて素晴らしいことを教えて下さった恩師がいる。（恩師のことは、これより先生とよばせてもらう）
先生は、私が小学５年生のとき、新しく担任に赴任された。
先生は自己紹介のときに、以前は中国の小学校に勤務していたことを話された。
そんな先生をクラスメイトは、馬鹿にした。「中国から来たんやって！」　「中国に帰れ！」と。（一方私は小さい頃から映画「ベスト・キッド」が大好きだったので、先生に中国の話を聞きたくてウズウズしていた）今思えば、きっと当時のクラスメイトに「中国」という国を軽蔑する明確な理由はなかっただろう。小さな頃から、「中国」という国に対するイメージを大人から刷り込まれていった結果がこれであったのだと思う。
そんなクラスメイトを前に、先生は話をして下さった。
「君たちはこれからたくさんの経験をして、大人になっていきます。今の自分が見たことないものや、感じたことがないものを、自分の世界だけに留めないで。実は、私も中国の小学校に勤務する前は日本で働いていたので、中国に対して偏見を持っていたときがあります。ですが、実際に中国へ行くと、以前の私が持っていた偏見なんて忘れてしまうほど良い経験をさせて貰いました。私は、皆にも将来沢山の経験をして、世界に対する見識を広めていって欲しいと思います。」
この話を聞いてから、先生に対して声を大にして中国を馬鹿にするクラスメイトはいなくなった。また、私がクラスメイトからいじめられていたこともあって、先生はとても私を気にかけて下さった。先生はとても情に厚くて、辛いことがあったとき、私と一緒に泣

いて下さったり、嬉しいことがあったときは自分のことのように喜んで下さったりもした。先生は、

「中国はとても情に厚い人が多くて、一度打ち解けたら、その人はもう大切な仲間だから！先生も中国にいる時、何度も周りの人に助けられていました。その人達が先生を助けてくれたように、先生もあなたを助けたい。あなたは先生にとって、大切な仲間だから。」と言って、私に一つの言葉を教えて下さった。

「明天会更好」。　先生曰く、この言葉には「明日はもっと良くなるだろう」というニュアンスがあるそうだ。この言葉は、今現在に至るまで、私の中でのおまじないの言葉なのである。

先生は私のクラス一同を褒める時も叱る時も、中国のことわざや言葉を教えて下さった。そのたびに私は、自分の世界がどんどん広がっていくような気がした。「明天会更好」含め、たくさんの自身の経験と言葉を教えて下さった先生にはとても感謝している。

小学５年生から７年が過ぎ、私は高校３年生になった。今は受験勉強に追われ、休む暇もないが、大人になったら、今よりももっと広い世界をこの身で体感し、見識を広めたいと思っている。

先生はあの後人事異動によって学校を離任され、会うことが難しくなってしまったが、今度会う機会が訪れた際には今一度感謝を伝えたい。

私の将来の夢は、あの当時私のクラスメイトだった人のような、中国に対する考えや偏見を持った人々を一人でも多く減らすことだ。そして私は未来の子供たちにも、先生のように沢山の素晴らしい経験を話せるような大人になっていたいと思う。先生が私にそうして下さったように。

母の故郷、私のルーツ

亜細亜大学
経営学部経営学科１年
齋藤　優人

私は中国人の母と日本人の父の元に生まれました。父は早くに母のもとを去り、母は一人で私を育ててきました。慣れない土地で小さかった私の手を引いて、18 まで育ててくれた母の姿は、自然と私に目指すべき人生の道筋を示してくれました。

私が初めて母のルーツに興味を持ったのは、小学校で家族インタビューの課題が出た時です。当時から母が友人たちの親御さんとは何か違っている事はなんとなく理解していたのですが、いざインタビューをすると自分が学校で習った事のない地名が幾つも出てきてひどく困惑したことを覚えています。私はそこで初めて母がこの日本の外で生まれて、日本で私を生み育てたという事を理解しました。友人宅へ遊びに行く事すらおっかなびっくりだった私には母がどれほどの覚悟をもって来日して子供を育てたのかとても推し量れません。

母がどのような思いで日本に来て、どれだけの思いをして私を育ててくれたのかを考えるようになったのは、だいぶ大きくなってからのことでした。母は故郷の事を多く語らない人でしたが、時折見せる疲れた横顔や、慣れない環境で育児をする事への不安を隠し切れない表情が、私に母の苦労を伝えました。学校では、友人たちとの違いを感じることも多く、「ハーフ君」と呼ばれて戸惑いを覚えたり、母が日本語で苦労する姿を見て自分まで肩身の狭い思いをした事もありました。この頃から自分が中国人の息子である事をどことなく意識し始めました。

中学生の頃、母が親兄弟と共に数週間ほど中国で過ごす事となり、私は一人で家を任されました。何十年ぶりかの故郷で羽を伸ばして欲しいと母を見送った次の日には観光している母家族の写真が届きました。そこに移っていた母の家族は、誰もが自然で温和な笑み

を携えていました。母が自分の家族と再会する様子を見て、彼女が日本でどれほどの孤独を抱えながら生きてきたのか、初めて実感したのです。電話の向こうで母の家族が流暢に交わす会話をひとつも聞き取れず、ただ頷く事しかできなかった私は、日本で母が経験してきた「異国での孤立」をほんの少しだけ体感した気がしました。しかし同時にその時、意味は分からないまでも私を褒めてくれているであろう暖かな言葉の響きは、私の中で何か新しいものを芽生えさせました。今まで「違うもの」として見ていた母のルーツが、「自分の一部」として受け入れられるようになったのです。それまでの私は、日本と中国の狭間で自分の居場所を見つけることができず、どちらか一方を選ばなければならないような気がしていました。でも、この一通の電話を通して、私は自分がそのどちらにも属しているのだという事を初めて強く感じるようになりました。

高校生になった頃には、母の母国語である中国語を本格的に学び始めました。最初は発音も難しく、挫けそうになることもありましたが、母が根気強く教えてくれるおかげで少しずつ話せるようになりました。母と中国語で会話ができるようになると、彼女の若い頃の話や、家族への想いも聞けるようになり、母との絆がさらに深まっていきました。日本語で語る母とは違い、母国語で話すときの母の顔は、どこか誇らしげで、そして懐かしさがこみ上げているように見えました。

私が 18 歳を迎えたとき、母はこれまでの苦労や過去を振り返りながら、私に「自分のルーツを誇りに思いなさい」と言ってくれました。それは、母がずっと心の中で自分に言い聞かせてきた言葉なのかもしれません。そして、その言葉は私にとっても大切なメッセージとなりました。私はこれからも、日本と中国という二つの文化を背負いながら、自分の道を歩んでいこうと思います。母が私に教えてくれたように、どんなに困難な状況でも自分のルーツを大切にしながら、前に進んでいく覚悟を持って生きていきたいと思います。